

論文審査の結果の要旨

論文提出者 飯野 りさ

論文題目「アラブ古典音楽の旋法体系に関する考察—アレppoの歌謡の伝統に基づく旋法名称の記号論的解釈—」

本論文は、シリアの古都アレppoに伝わる東アラブの古典音楽の旋法体系の構造を（１）文化内在的な解釈と（２）音楽学的な分析という二つの異なるアプローチから明らかにしようとした試みである。筆者が注目するのは旋律様式に関する名称群が示すこの音文化において果たす機能である。本論文は、それぞれの名称が示す旋律的な響きに対する情緒感や印象の違いが旋法体系の構造を組み立てる上で重要な役割を果たしていることを考察する。アレppoは、近代西洋音楽の導入や音楽の商業化の影響を強く受けたカイロなどとは異なり、これらの名称群が比較的多く残り、古典音楽の伝統が受け継がれてきた。筆者はこの都市の旧市街において音楽実践に関する精力的なフィールドワークを実施し、この論文を完成させた。

本論文は、文化内在的な解釈を行なう第１部と音楽学的な分析の第２部から構成される。それに先立つ序章では、古典アラブ音楽研究をめぐる方法論的な問題提起がなされ、とくに従来のマカーム（旋法）概念を用いた音楽理解の問題点を指摘し、音文化を内在的に分析するために旋律様式に関する名称の研究の重要性を指摘する。

第１部「ナガムをめぐる文化内在的枠組み」

第１章「歌謡の伝統の社会文化的構造：名士とムンシドから成る歌謡文化共同体」は、フィールドワークの対象であるアレppoにおいて歌謡文化の伝統が宗教歌手（ムンシド）とそれを最層にする町の名士階層によって支えられてきたことを考察する。ムスリム社会における宗教と音楽の関係をめぐる社会構造論がその議論の軸を構成する。

第２章「音楽の情緒的体験：文化的概念としてのタラブ」は、古典アラブ音楽を特徴づける基本概念であるタラブの意味構造を考察する。この概念が示す情緒的体験を旋法に特化して示すのがナガムという概念であり、個々のナガムの名称が音楽学的には音名・小音階名・旋法名を示すことを明らかにし、文化内在的な理解と音楽学的な分析を結びつける方法論的つながりを示すのが本章の目的である。

第３章「実践者の音楽知：記号としてのナガム体系」は、古典アラブ音楽の実践者であるムンシドたちの間で行なわれる教育内容の分析を通じて、ナガム体系の知識の特徴について考察している。この口伝による教育で伝えられる豊富なレパートリーの構成から、旋律の開始部のナガム名称の重要性が指摘される。

第２部「旋法の名称とその音楽学的機能」

第４章「一音の響き：旋律の開始部と支配音の概念」は、これまで十分な研究がなされてこなかった支配音について、ナガム名称の持つ機能の点から考察し、支配音が旋律の開始部において旋律形成の中核となる音域の核音であることを具体的な旋法の事例を通じて明らかにしている。

第５章「狭旋律としての響き：核音と小音階ジンス」は、小音階名でもあり旋法名でもあ

るナガム名称を中心に考察し、旋律の開始部に使用される支配音、その支配音を核音とする小音階、小音階とそれに属する支配音が形成する比較的音域の狭い旋律（狭旋律）がそれぞれの旋法に特徴的な響きを作りだし、これが文化内在的なナガム名称とも呼応している点を明らかにしている。

第6章「旋法としての響き：名称を付与されている旋律」は、旋法名としてのみ存在する名称の事例を扱う。この考察によって四度や五度の小音階の音程以上に広いオクターブの音域で形成されている固有の響きを示す名称があることが確認された。以上の第2部の考察から、旋法の名称は、楽音・小音階（狭旋律）・音域の広い旋律の三つを指し示し、旋律の開始部で各名称と記号的に結びついている音的響きが提示され、さらにその響きは旋法としての旋律行程をも規定する役割を果たしていることが解明された。

終章では、論文全体で得られた結論が示されている。第1部で扱ったムンシドの音楽実践の蓄積によって伝えられてきた古典アラブ音楽の旋法体系は、文化内在的には各旋法が示す旋律的響きと対応する記号の体系を形成していることが、第2部の音楽学的な分析によって明らかになったとする。

本論文は、古典アラブ音楽研究の中心テーマである旋法体系について、音楽学的な精緻な分析を行なうとともに、この音文化の文化内在的な理解を試みた意欲的な研究である。審査委員会では、こうした内在的な視点を持つ二つのアプローチによって一つの民族の音楽を総体的に捉えることに成功した画期的な研究である、また音という非文字資料を使った労作であるなどという高い評価を示す意見があった。その一方で、第2部の音楽学的な分析は傑出した内容で感銘を受けたが、第1部の文化内在的考察は文献渉猟も不十分であり、また第2部を中心に論文全体を大幅に書き直してより理解しやすい内容にできたはずである、近代西洋音楽学の根本的な構造改革を迫る可能性を持つが、いまだモニタージュ作業に留まっているなどという評価もあった。その他、研究対象としてのアレppoの文化史的な地理的位置づけをめぐる問題、本論文では対象外としたキリスト教徒社会の音文化との関係などについての質問と議論がなされた。また、人名表記の問題や分かりにくい表現や用語など文章表現の問題などが指摘され、その他基本的な文化概念の使用に対する疑問なども示された。

以上に指摘された問題点に対し、論文提出者はいずれも誠実にまたおおむね十分な内容をもって回答した。審査委員との議論は、本論文の内容のいっそうの理解を進め、また今後の研究の進展に示唆を与える内容となった。

本論文は、上記のようにいくつかの修正あるいは改善すべき点を抱えているが、西アジア・中東の古典音楽研究において、国際的にも従来の研究水準を超えた優れた内容を持ち、その学術的貢献度は高い。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。